

の重要性が理解できると思われる。また、埋設管の周囲1 m程度の範囲内にある土砂は、めんどうでも人力によって除去すべきである。なぜならば、のちに埋設管下方の土を機械掘りするとき、バケットその他が管に当たるといふ思わぬ事故が、起こり得ないとはいえぬからであり、さらに、すでに深く掘削されている部分から管の直下に向かって土砂を排除するとき、土砂が崩壊して管に当たることも絶無ではないからである。

9. 埋めもどし時の問題点

地下構造物が完成すれば、その頂面上に土砂を埋めもど

し、懸垂されていた管を再び地中に埋設することになる。この場合、管の直下の土も他の部分と同様に十分締固めたものはもちろんであるが、機械をそこまで入れることができないので、実は困るわけである。そのため従来は、俗に馬と呼んでいる3、4本の木柱とか、短いまくら木で管を支え、それらを管とともに埋め殺す方法がしばしば採用されていた。しかし、それでは、木材の腐朽するおそれが残るので、管の直下に、砂、砂利のような良質の材料を入れるとか、コンクリートブロックを当てるとかして、管の直下の地盤係数を他の部分とほぼ同一にするようなくふうはないものであろうか。
(原稿受理 1971.11.18)

学会図書紹介

土質工学会編

「土質調査法」第1回改訂版発行のお知らせ

社団法人 土 質 工 学 会

先に改訂をみた「土質試験法」の姉妹編である「土質調査法」は、諸般の関係で改訂作業が遅れていたが、このほどようやくほとんど全面的に装いを改めて、その第1回改訂版が完成出版されることになった。

本書は、前書と同じように、「土質試験法」と並んで土質基礎関係の調査試験法全般を解説しようとするものであるから、もっぱら現場で試料土を採取・観察したり、原位置土の性質について試験をしたり、または地盤土や地下水の基礎構造物と関連する性状を測定したりする、いわゆる「土質調査法」だけをとりあげているが、しかしその内容はまったく一新されて執筆陣もほとんど変わっている。

すなわちまず「調査計画」の記述から始まって、「ボーリング」、「地下水調査」、「特殊な測定」や、「特殊土の調査方法」などの章は目新しいものであり、その他の各章にも8年に及ぶブランクを十分に埋める最新の内容が盛られている。

したがって本書は、これから新しく「土質調査法」を勉強しようと思われる方にはもち論、従来も土質調査法に親しんできた方が、その後試験方法についてどのような改変が行なわれたか、新しくどんな試験法が提案されているかなどを知るためにも、好個の参考書となるものと考えられる。

なお本書の具体的な内容は次のとおりである。

第1章 調査計画	三木五三郎
第2章 地盤地質調査	青木 滋・池田俊雄
第3章 測定法概論	〈講座(現場測定のポイント)委員会〉
第4章 物理探査法	今井 常雄
第5章 ボーリング	〈サンプリング研究委員会〉
第6章 サウンディング	小黒譲司・室町忠彦
第7章 サンプリング	〈サンプリング研究委員会〉
第8章 地下水調査	河野伊一郎・松尾新一郎
第9章 載荷試験	上野長八郎・南雲貞夫・吉中龍之進
第10章 基礎グイの試験	藤田 圭一
第11章 圧力の測定	〈講座(現場測定のポイント)委員会〉
第12章 変形測定	〈講座(現場測定のポイント)委員会〉
第13章 施工管理試験	宇梶文雄・土肥正彦
第14章 特殊な測定	

A ラジオアイソトープ利用による土質調査	
----------------------	--

	〈R・I 利用法研究委員会〉
B 地盤振動測定	〈土の動的性質委員会〉
C 動的土圧(間ゲキ水圧)の測定	
	〈土の動的性質委員会〉
D 腐食性調査	岩佐茂作・喜田大三
E 植生工調査	新田 伸三
第15章 特殊土の調査方法	
A 有機質土	大平至徳・河野文弘・渡辺 進
B 火山灰質粘性土	〈火山灰質粘性土執筆小委員会〉
C マサ土	〈マサ土研究委員会〉
D シラス	〈シラス執筆小委員会〉

付 録

A 5判 775 ページ

定価 3,300 円 会員特価 2,500 円